
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第160号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.06.09 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1402 部*****

□ 目次 □-----

<今週の提言> 食の倫理とBSE問題 大山勝夫

<読者の声> 豊嶋さんから

<旬を食べる一野良からの便り・24> “ラッキョウ” 小泉浩郎

<高齢者の健康情報>老人の痒み・かさかさ肌の体験 原田 勉

<日本たまご事情>

鶏卵とコレステロールの関係を考えるフォーラム2005 齋藤富士雄

<玉川上水の謎> その1 はじめに 安富六郎

<80才からのメッセージ>

学徒出陣・下級将校の補充--戦時体験(その2) 原田 勉

<ニュース・農文協65周年に近藤先生のメッセージ>

<編集後記・同人の近況報告> 5月26日~6月8日

<今週の提言> 食の倫理とBSE問題

食品安全委員会プリオン専門調査会は米国産とカナダ産牛肉の輸入再開に向けた安全性について審議を始めた模様である。先に同委員会では国内産牛肉に限り20ヶ月齢以下の牛を検査の対象から外すことを容認した答申を出したところだ。しかし、同委員会が一般から募った意見によると、寄せられた1250件のうち、「全頭検査の緩和は時期尚早」「見直しの前に科学的な解明が必要」など7割がこのたびの見直しに反対、同委員会の結論との間に大きな溝があることも事実である。

2003年7月に「食の番人」として鳴り物入りで内閣府に食品安全委員会

が発足した。当時の初代委員長、寺田雅昭氏はいう「食品は生活の基盤、害があってはいけない。食品のリスクを科学的・客観的に判断していきたい」と。今こそこの決意を新たにして外国産牛肉の輸入問題に取り組んでもらいたい。

アメリカ最大の畜産業団体（NCBA）は昨年の大統領選挙ではブッシュ共和党の支持を表明したという。このNCBAはアメリカ農務省にたいし強い影響力を持ち、このたびの牛肉輸入再開問題でも日本にたいする政治的圧力を感じる。朝日新聞5月31日によれば全米商工会議所のトーマス・ドナヒュー会頭は、小泉首相を訪れ米国産牛肉の輸入再開をせまったと報じた。

そもそも売り手であるアメリカが消費者である日本にアメリカの牛肉を買えといい、買わなければWTOに提訴すると脅しをかける。これはおかしい。ひところ「お客様は神様です」という言葉がはやったが、売り手が勝手に作った製品を消費者が買わないのはけしからんという論理である。あくまでも商品を選ぶ権利は消費者（日本）にあるし、売り手は消費者の要望に合わせるのが商売の論理というものだ。

ここで、もうひとつ食の倫理について提言したい。人類はこれまで動物の狩猟、家畜化、植物の採取、微生物の発見、そして動植物・微生物の馴化と改良を通じて多種多様な食物を享受できるようになった。しかし、近年、人類は食用とする動植物にたいして敬意と配慮を欠き、特に動物にたいしてその尊厳を無視しているのではないか。その結果、いまや人類は動植物や微生物から逆襲されるようになった。BSE問題を契機に食の倫理を真剣に考える時期である。

大山勝夫
山崎農研会員・日仏農学会会長
y.nouken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●06/06 豊嶋さんから

こんにちは。無洗米にするために灯油をお米にかけるのですか。

●お答え

『電子耕』2002.04.04-80号 寄稿

<食品情報>無洗米への疑問を提起(天地米店)

<http://nazuna.com/tom/020404musenmai.html>

の、

- > 3. 逆に、環境負荷がある。
- > 1) 一部の無洗米ヌカの処分が問題になる可能性がある。
- > 今まで、米ぬかは業界内でリサイクルされていた。
- > 2) 灯油を使用している。

に関する質問かと思いますが、これは、無洗米製造課程で灯油を燃やしてヌカに熱処理を加えるのだそうです。

詳しくは、天地米店さんサイト

<http://www.107heaven-earth.com/>

の

無洗米考 3. 環境悪化の懸念

<http://www.107heaven-earth.com/musen/musen2/musen2.html#disad3>

にあります。

よろしく御願います。

<旬を食べる一野良からの便り・24> “ラッキョウ”

生ラッキョウの出回りは、5月から6月である。スーパーの店頭にも泥つきのラッキョウが並ぶ。

子供の頃、猿とラッキョウの話聞いた。食べものだと分かるが、最後まで皮をむき続けるという。当時は、あんなくさくて辛いものを、猿は食べるかと疑問に思っていた。

あの、臭みと辛さがラッキョウの本性、その源は、強壮効果にもすぐれた硫化アリルである。塩漬け、甘酢漬け、てんぷら、煮付け、時には味噌汁の実に

もなる。だが、本来の旬の味は、採りたてを井戸水で洗い、生味噌をつけて、

熱燗のつまみにするのが最高だ。辛味のなかのほのかな甘味、かりっとした歯ざわり、昼間の長い、薄暮の空を眺めながら、湯上りの一杯は無常の幸せである。

このラッキョウの原産地は中国。わが国への伝来は、1世紀も前らしい。最初は薬用であったらしいが、知恵と工夫でそれぞれの地域に郷土食として定着

した。この在来のラッキョウは、新しいニーズに応じて、この50年で2つの大変身をした。1つは「花ラッキョウ」への変身、2つは「エシャレット」への変身である。

「花ラッキョウ」への変身の場合は、福井県三里浜である。砂丘畑は、ラッキョウの生産に適し、漬物用大玉「らくだ」の大産地であった。1人の生産者が、6月の収穫適期を逃し、翌年になってしまった。掘り起こしてみると、玉が分かれ小さくなっていた。普通なら格外品として種子用ぐらいしかならないが、当時の三里浜特産農協は、「これは新しい需要開発になる」と商品化した。無骨な男の親指の爪のようなラッキョウから、色白な乙女の小指の爪のようなラッキョウへの変身である。

秋、絨毯のように赤紫の小さな花をつけることから、地元では当時「花ラッキョ」と呼んだが、大手メーカーのセールスで「花ラッキョウ」となった。8月～9月に植え、一夏越した翌年の6月に収穫する。この栽培が普及したおかげで、花の絨毯も観光資源になった。怪我の功名である。

「エシャレット」への変身の場合は、静岡県浜松市近郊の海岸砂丘地である。50年前、若採りしたラッキョウを生食用「根ラッキョウ」として商品化した。当時、築地市場の常務が「ラッキョウはフランス語でエシャロット、これがよい」と命名した。静岡県だから、葉の部分を三つおりに束ねているが、あれは「島田髷」だという。

本場フランス、ベルギーのエシャロットは、タマネギの変種、チューリップの球根のような野菜で、当地の料理には欠かせない香味野菜だと聞く。だから、

本ものと区別するため最近は、「エシャレット」と呼ばれている。そう、エシャレットは、日本在来のこれまた無骨な男を、覆土（10cm）して軟白にし、若採りして島田に結った純日本の美人なのだ。最近は、より見栄えをよくするため、その島田が、青麦若葉のかつらに変身している。

猿は、ラッキョウは、みな皮だと捨て去った。何が本物か見間違うと大事なものを失ってしまう。大変身したラッキョウは、今日も食卓の脇役として、その役を果たしている。

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<高齢者の健康情報>老人の痒み・かさかさ肌の体験

昨年から、急に皮膚の老化現象に悩まされた。とくに冬の乾燥期に、体全体に痒みを覚えた。皮膚がカサカサ乾燥して、夜も眠れない状態になった。おまけに頭部に湿疹ができて痒い症状が続いている。

この一年、いろいろ医者に診断してもらい、治療薬も使ってみたが、現在、完全には治っていない。一年間経っても治っていないことは、今までに経験したことがなかった。

老人の痒み・カサカサの克服は、そんなに簡単ではない。恥ずかしながら、この経験をさらけ出して、諸兄の教えを受けたいと思う。

（1）皮膚の痒みは何故起こるのか

皮膚は、いちばん上の表皮、その下の真皮、皮下組織の3層からなっている。皮膚は体全体を被っているだけでなく、生きていく上で欠かせないいくつかの働きがある。

この各組織が乾燥したり、外敵の水虫菌や虫刺されが起こると、知覚神経によって脳に伝わり、痒みを覚え、カユイカユイになるのである。

老人になると 60 歳ごろから表皮が乾燥し、いわゆるカサカサ（乾燥肌）になる。

（2）乾燥肌の防ぎかた

男女とも、40 歳から 50 歳ごろ、いわゆる更年期障害の始まりで、ホルモンの分泌が減少する。ホルモン分泌の減少は、骨粗しょう症も起こすが、同時に皮脂の減少となり、乾燥肌の原因になるのである。

冬になると、足のかかたが硬くなり、角質層がカサカサになる。これも同じ乾燥肌である。

皮脂やホルモンの分泌は、若い頃と同じようにはならない。それを防ぐには、生薬やハーブ類で少なくすることができるが、これは容易ではない。

私は、鍼灸師の指導で、水分を保持し、体質を変えるために、白湯のほかに、リンゴ 100%ジュースとニンジン 100%ジュースを、それぞれ毎日 200 グラム以上飲むようにしている。これで少しは防げる。

生活環境の保湿に心がけ、室内が乾燥して湿度が 50%以下になったら、加湿器で水分を補充している。

それでも痒みが止まらないので、専門の皮膚科の治療を受けて、次の対処療法を行っている。

毎日の入浴後、体を拭いて 3 分以内に、手足と体のかゆいところに保湿剤を塗る。皮膚の水分を保持し、カサつきを抑える。薬品は商品名で、ヒルドイドローション。

（3）足のかかたや角質化した所には、皮膚の水分を保持し、硬くなったりカ

サカサした皮膚を柔らかくするために、角化症治療剤のケラチナミン軟膏 20% を塗る。

(4) 水虫対策—夏に多く発生するが、冬の間も忘れず治療する。

特に足の爪に入った水虫菌は、なかなか退治できない。これには、水虫やカンジタ等の真菌の発育を抑える効果のある抗真菌剤、ラミシール液を塗る。同じく真菌の発育を抑える効果のあるニゾラルクリームを塗る。足のかかとなど硬くなったところは、角化症治療剤と併用する。

(5) 頭の湿疹—これもなかなかかゆみが取れない。いろいろな薬を試してみたが、現在は、副腎皮質ホルモン剤のアンテベートローションを使用している。

人によって相性もあり、レスタミンコーチゾンを使用する場合もある。

(6) 「痒い」を避けるコツ

「痒み」は掻きたくなる皮膚の感覚である。痒いから激しく掻けば、角質(皮膚)は傷つき一層痒くなる。ひとりでに掻くようにならないよう、できるだけ「痒い」を避けることが賢明である。

入浴の際も擦りすぎないこと。汗や汚れによる皮膚の汚れを避けること。高温や乾燥、紫外線を避ける。食べ物ではトウガラシやアルコールをやめ、ストレスを少なくすること。睡眠不足にならないように注意する。

(7) 副作用の注意

列記の薬品はあくまで、専門医による私の診断結果に基づくものである。

皮膚病の外用薬は、いずれもステロイドなどの激しい副作用も出ることがあるから必ず皮膚科の専門医に相談するべきである。

<参考資料>

東京通信病院

<http://www.tth-japanpost.jp/>

〒102-8798

東京都千代田区富士見 2-14-23

電話番号 03-5214-7111(代表)

予約専用電話番号 03-5214-7381

皮膚科直通 (03) 5214-7010

<http://www.tth-japanpost.jp/kabetsu/hifu.htm>

山下鍼灸院

<http://nazuna.com/tom/yamashita-ac/>

Yahoo!ヘルスケア - お薬情報・検索

<http://health.yahoo.co.jp/medicine/>

くすりと健康の情報! おくすりナビ

<http://www.okusurinavi.com/>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

<日本たまご事情> 鶏卵とコレステロールの関係を考えるフォーラム 2005

6月14日午後、東京ホテルオークラにてアメリカの **Egg Nutrition Center** の **Dr.McNamara** を迎えておこなわれるフォーラムの最終案が決定した。フォーラムに参加する顔ぶれが凄い。

板倉弘重(茨城キリスト教大学)

浜崎智仁(富山医科薬科大学)

高田明和 (ソニーKK産業医)

辻 久子 (守口市保険総長)

これらの先生方が自説を展開しながら、**Dr.McNamara** と議論をしてくれる。テーマは「鶏卵のコレステロールが及ぼす健康への影響」である。

アメリカでも日本でも同じであるが、いままで卵のコレステロールは不当に悪者扱いされてきた。アメリカではその悪宣伝が効いて卵の消費量が落ちたことになったことは再三申し上げている。

この事態に対して、アメリカの鶏卵の鶏卵関係者が一致協力して巻き返しに出た。新しい科学的な知見のもとに地道に宣伝活動を続けた、そして見事に卵の消費量は回復してきている。日本では未だに多くの医者、大学の先生たちが卵について科学的に古い知見のもとに卵とコレステロールの悪口を言っている。

この問題に対して日本養鶏協会と日本鶏卵生産者協会は短時間のうちに素晴らしい企画をしてくれた。興味のある方は、席があればどなたでも参加できると思うが、日本鶏卵生産者協会事務局 03-3297-5508 に問い合わせしてほしい。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

【参 考】

「鶏卵とコレステロールの関係を考えるフォーラム 2005」 参加者募集中！！

開催日：2005年6月14日（火） 14:00～17:00（13:30 受付開始）

<http://www.eiyo21.com/event/20050525174514.html>

申込締切：6月10日（金） 参加費：無料

<玉川上水の謎> その1 はじめに

武蔵野を流れる玉川上水はいま（一部の区間を除いて）掘割の底の小川となっている。かつて、この上水には渦巻くほどの水量があった。筆者が小学生であった1940年代頃には「人喰い川」といわれ、遊びに行ってはならない場所であった。1960年に玉川上水はその使命を終えたが、いま再び都市計画の道路整備によって変わろうとしている。

玉川上水に関する資料には玉川兄弟の偉業がたたえられている。水路の周辺地形を地図上または現地で観察してみると、その工事の正しさには目を見張る

ものがある。そして水路の路線選択の勇気には驚かされる。

だが、この大事業には設計図もなく、工事の詳細も残されていない。その内容については子孫によってまとめられた程度の記録しかない。水路の計画・設計・施工に関することは全くといってよいほど分かっていない。これではどうも合点がいかない。

玉川上水開削技術に興味を持つとき、その歴史については、詳細な研究は多
ある。また不明点も指摘されているが、技術的な核心部分については、ほとんど分かっていない。誰もが不思議に思うのは、さしあたって次の4点であろう。

(1)工事期間が1年足らずという短さである。(2)工期短縮のために、工区を決めて一定の規格で一斉に掘削したというが、これほど大切な工程に設計図がなかったのであろうか。(3)多摩川の渇水期や洪水期の流量特性などを調査して、取水の場所や堰の規模が決まるのであるから、どんな調査記録あったか。
(4)どのような手順で路線が決定されたか。

このような難しい計画、設計および施工を提灯による測量や勘だけで成功したとは常識では考えられない。そうではなく、実はどこかにすばらしい科学技術が隠されているに違いないと、いぶかるのは無理からぬことであろう。

私は歴史家ではなく、単なる農業土木の技術屋にすぎない。だから、ここで述べることは、これらの謎に答えるのではなく、単に皆が抱くであろう疑問を整理したにすぎない。これがきっかけとなって水辺に興味を持ち、緑道を散策するようになっていただければ筆者として法外の喜びである。

安富 六郎

山崎農研会員・電子耕編集同人

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<80才からのメッセージ> 学徒出陣・下級将校の補充―戦時体験（その2）

原田候補生は、1945年、昭和20年、敗戦の時、陸軍航空予備士官学校生徒であった。

敗戦がもう少し伸びていたら、見習士官として、米軍の上陸を迎え撃つ最前線の指揮をしていたであろう。

1942年、昭和17年、太平洋戦争に突入してから南方洋上まで戦線を拡大し、消耗率の高い下級幹部の補充に学生を動員した。

軍には「学生は軍人に適さない」という常識が支配していたが、戦局はそれを許さなかった。1943年、昭和18年、大学、高等学校、専門学校の文科系学生・生徒の徴兵猶予を停止し大量動員することになった。

学徒出陣といえば、このときのことが注目されるが、実際の兵力への学徒動員はこれにとどまらない。

日米開戦の前、1941年、昭和16年、10月16日「大学・専門学校在学年限短縮決定」が行われた。徴兵猶予は学生の恩典であったが、卒業繰り上げで軍隊に入るようになった。学徒出陣の始まりである。

当時は、中等学校以上大学まで学校に配属将校を置き、軍事教練は正課に授業であった。

その成績により各学生を「将校適任」「下士官適任」「幹部不適任」にわけ、それぞれの出身地連隊区に報告していた。

私の場合も、農業学校であったが、軍隊に入ってから一期の検閲と同じ頃、幹部候補生試験があった。これに合格したために、幹部候補生班として内地の部隊内で幹部教育を受け、やがて予備士官学校へ入校し、見習士官、予備役少尉の途を進む予定になっていた。

予備役といっても日中戦争の途中から、満期除隊・即日召集という形で幹部となる仕組みであった。

原田候補生が所属していた、四国・松山の第3航空教育隊第1中隊は中隊長が陸軍士官学校出身の小野大尉であったが、その他の教官（小隊長）7名は、

すべて幹部候補生出身の将校であった。

正規の現役将校（職業軍人）は、陸軍士官学校出身であったが、昭和 17 年ころから、消耗率の高い下級指揮官の絶対数が不足していた。

そこで、当時はどうしても中等学校以上の軍事教練を受けた学生を採用しなければならなかった。いや、むしろ予備学生がいなかったら、太平洋戦争は成り立たなかったであろう。

こうして 1942 年、昭和 17 年から 1945 年、昭和 20 年の間に動員された予備学生は、次々と学徒出陣し、満州、中国、フィリピン、インドシナ、マレー半島、ボルネオ、インドネシア、ソロモン、ガダルカナルなど、南方洋上の島に、そして最後は沖縄、硫黄島、ビルマなどの前線に下級将校として戦闘指揮官として戦い、戦死したり戦病死することになった。

また、最後の人間爆弾ともいうべき、特別攻撃機、人間魚雷として、戦没した。これらは、『きけ わだつみのこえ』に編集され発行されている。

<参考資料>

朝日歴史写真ライブラリー『戦争と庶民』（2）窮乏生活と学徒出陣

朝日新聞社 1995

（農文協図書館で貸し出し可）

山本七平『一下級将校の見た帝国陸軍』文春文庫 1987

★紀伊國屋書店 BookWeb

<http://bookweb.kinokuniya.co.jp/indexw.html>

で、検索するとキャッチコピー・目次が読めます。

三國一朗『戦中用語集』岩波新書 1985

<http://www.iwanami.co.jp/.BOOKS/42/4/4203100.html>

（2005 年 7 月 21 日ごろ重版でき）

わだつみ会編『学徒出陣』岩波書店 1999

<http://www.iwanami.co.jp/.BOOKS/00/X/0028090.html>

（品切重版未定）

★古書のネット検索・入手は、

高原書店

<http://www.takahara.co.jp/index.php>

スーパー源氏

<http://sgenji.jp/>

が、お薦めです。

日本戦没学生記念会編

新版『きけ わだつみのこえ』岩波文庫 1995

<http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/33/5/3315710.html>

同【ワイド版】

<http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/00/6/0071380.html>

新版 第二集『きけ わだつみのこえ』岩波文庫 2003

<http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/33/3/3315720.html>

同【ワイド版】

<http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/00/X/0072480.html>

『電子耕』100号記念企画「戦争を語り継ぐ」2003.1.9.

3、農業学校の軍事教練

<http://nazuna.com/tom/war/03gunjikyouren.html>

6、松山陸軍航空教育隊

<http://nazuna.com/tom/war/06matuyamakuu.html>

7、軍隊生活・屍衛兵

<http://nazuna.com/tom/war/07sieihei.html>

★ちなみにナチス・ドイツの青少年少女の戦力動員については、WEBでは、

福岡教育大学西洋史研究室の卒業論文集『城山西洋史』のページ

<http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~tamaki/joyama/joyama.htm>

から、

2000年度卒業生の河室圭亮さんの卒業論文

「第三帝国下の青少年

——ヒトラー・ユーゲントに存在する「魅力」——」

<http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~tamaki/joyama/joyama2000/kwmr.htm>

第3節 戦時中のヒトラー・ユーゲント

<http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~tamaki/joyama/joyama2000/kwmr2.htm#setu3>

および、

toda さんの「ナチス・ドイツの青少年〜ヒトラー・ユーゲント」

<http://www2.ocn.ne.jp/~toda/>

に詳しいです。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

★印部分挿入：原田太郎

<ニュース・農文協 65 周年に近藤先生のメッセージ>

6月3日 日本出版会館で行われた農文協創立 65 周年記念式典に、106 歳の近藤名誉会長から次のような祝辞が寄せられた。

農文協創立 65 周年を祝し、更なる発展を期待する。
名誉会長 近藤康男

農文協が、65 周年の永きに亘り活動を継続されてきたことについて、お祝いの言葉を申し上げます。

創立以来の先人達が開拓した農村文化運動を、戦後再建したリーダーは、更に国民全体に役立つ文化運動に発展させ、今日に継続されました。

この功績は、本日ここに集まれた役職員皆様の奮闘の賜物であります。

特に最近のめざましい広範な活動は、『現代農業』『食農教育』などをはじめ

めとする各種文化財の制作・普及に見られるとおりです。

今後は、更に発展させて、日本国内は勿論、アジア諸国にも影響を与え、ひいては世界平和のために寄与するように、諸君の活動を期待します。これからは100周年記念をめざし尽力されるようお願いしたいと思います。

私の思い出として印象にあることは、1947年に理事に就任してから、『近藤康男著作集』を始め『明治大正農政経済名著集』『昭和前期農政経済名著集』『昭和後期農業問題論集』などの責任編集に当たり刊行したことです。

さらに『農文協五十年史』『三世紀を生きて』の執筆は忘れることの出来ないものでした。今後も命ある限り農文協の活動を支援し、その発展を期待します。

記念式典に出席したいのは山々ですが、歩行困難につき残念ながら欠席させていただきます。

2005年6月3日 百六歳

<参考リンク>

◆農文協ルーラルネット

<http://www.ruralnet.or.jp/>

◆農文協のご案内

<http://www.ruralnet.or.jp/nbk/nbk.html>

◆農文協 1940 年から 1996 年までのトピックス

<http://www.ruralnet.or.jp/nbk/nbk-topics.html>

◆農文協 60 周年特集（農文協図書館サイトから）

◎『現代農業』の変遷 1922・1941・1946・1949・1960・1969・1997～

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/nbk/gn1.html>

◎農文協再建初期の図書

1950 肥料・1951 獣医・1953 演劇・1952 すまい・1953 野菜・1956 サークル

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/nbk/saiken1.html>

◎近藤康男の3世紀

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/102/kn1.html>

◆近藤康男の本

<http://www.ruralnet.or.jp/news/kondou/tankou.html>

◆農文協図書館：近藤康男文庫・紹介

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko1.html>

◆近藤康男ホームページ

<http://nazuna.com/100sai/>

<編集後記・同人の近況報告> 5月26日～6月8日

日中関係がぎくしゃくしだしてからそうとうの時間が経過している。複数ある原因のうち、最大のものはお泉首相による靖国神社参拝問題であろう。

ところで、「靖国は日本の国内問題、それをとやかくいうのは内政干渉である」という声が強い。

思想史家の関曠野さんは「内政干渉というのは、他の国家の主権を束縛したり侵害したりすることを指しますが、同時に、近代的な主権概念とは、他の主権国家との関係において存在するものです」と言う。なるほど、一国の主権が問題になるのは、常に他の国との関係においてであって、“もしも”世界に一つの国しかないのであれば、「わが国の主権は…」と言うこと自体無意味である。

いま日本で聞かれる「内政干渉」という言い方には、「“うち”のことには、“そと”から口を出さないで」という意味合いが非常に強いが、これは近代的な主権のとらえかたに真っ向から反する。このような立場にたてば、アメリカによるイラクへの侵攻も批判できなくなるし、中国における環境問題についても発言できなくなる。北朝鮮における人権問題などもってのほか、ということになるだろう。

先の戦争をめぐっていま必要なのは、少なくとも日中韓三国によって、あの戦争についての共通認識をつくりあげることではないか。

山崎農業研究所会員・田口 均

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

-
- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
 - 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
 - 3、1回1テーマ、10行位に。
 - 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
 - 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 161 号の締め切りは 6 月 20 日、発行は 6 月 23 日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 160 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2005.06.09（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』*****

.